

日本川崎病研究センターニュースレター

(No. 29) 2015. 1. 1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

90歳を迎えて

川崎富作



今般いわゆる卒寿を迎え、白寿まであとわずかとなりました。寿命の許す限り、頑張りたいと存じます。

思い起こせば私の小児科医としての人生は昭和23年6月千葉医大小児科に入局したときから始まりました。当時無給で生活が苦しく主任教授（佐々木哲丸教授）にそのことを訴えましたところ、東京の日赤病院小児科（内藤寿七郎部長）で新人を求めているとのことですので紹介されました。そこで日赤病院小児科に勤務することが叶い僅かではあるが月給までもらえる幸運に巡り会えました。昭和25年正月明けのことです。これが私の人生の幸運の始まりです。

日赤では内藤寿七郎先生が部長で非常に多くの患者さんが受診に訪れていました。そこで私は小児科医としての生き甲斐を感じることができました。部長の内藤先生は

日本小児科学会東京地方会に我々の受け持った患者さんの症例報告をするよう命じられました。これが後の小児科医としての研究生活の基礎となり、研究者としての基本を身につけることとなりました。

小児科医として約10年がたったある当直の夜、今まで経験したことのないユニークな臨床症状の4歳3ヶ月の男の子を受け持ちました。この子は今考えると典型的な川崎病の臨床症状であったのですが、当時診断をつけることができませんでした。医局の症例検討会に提示してみんなの意見を聞きましたが、納得のゆく回答は得られませんでした。結局、診断不明との結論になりました。その後も1年半の間に同様の症例の患者さんを経験したので、日本小児科学会千葉地方会にユニークな臨床症状をもった7例を報告しました。しかし、聴衆からは何の反応もありませんでした。しかし、その後も同様の症例を時々経験して、その後6年間で50例経験したので論文にまとめて「指趾の特異的落屑を伴う小児の急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群（自験例50例の臨床的観察）」と題してアレルギー学会雑誌にカラー写真を付けて発表しました。その雑誌を見た世界中の研究者から別冊をくれという要望があり、200部作った別冊がたちまちのうちに捌かれました。このことはこの病気に対する関心の深さを実感させられました。

その後の私の人生は、川崎病一本槍の人生を突き進んでまいりました。気が付けば、玉手箱を開けたかのように90歳を迎える年となりました。これも皆さまのご協力のお陰と感謝しております。

今まで多くの研究者の方々が、川崎病の原因の解明に挑戦されてきましたが、未だに手がかりさえ掴めていないのが現状です。近い将来、内外の研究者によって川崎病の原因が明らかになり、予防法の確立が可能になることを強く期待したいと存じます。

今年は2月にハワイにおける国際川崎病シンポジウムに参加致します。皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

(当センター理事長)

ニュースレター 27 をお届けいたします。
今回は川崎先生卒寿のお祝い記念号です。

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

川崎先生との出会いから間もなく半世紀
柳川洋



川崎先生 卒寿おめでとうございます。

川崎富作先生がはじめて国立公衆衛生院疫学部長室に重松逸造先生を訪ねて来られたのは、1970年の2月でした。かれこれ45年も前のことになります。川崎先生が厚生省に川崎病(当時は、小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群(MCLS)とっていました)の研究費を申請に行かれたとき、当時の厚生省科学技術参事官加倉井駿一先生に「疫学調査をされましたか」、「重松先生に相談しなさい」といわれたために来られたと伺っています。

疫学部として川崎病の研究に協力することになり、私のところにおはちが回ってきました。当時は野のものとも山のものともわからない川崎病のお手伝いすることには、あまり気が進みませんでした。私は、公衆衛生院疫学部に採用されて2年目の新米であり、断ることもできず、担当することになりました。川崎先生とのおつきあいの始まりであります。以来、川崎先生は足繁く公衆衛生院に通ってこられました。広尾の日赤中央病院(現在の日赤医療センター)から白金台の国立公衆衛生院までは、車で10分くらいの距離で、いつも途中の店で仕入れたケンタッキー・フライドチキンとダルマ(サントリー・オールドの通称)持参で、中古車の黒いクラウンを運転して来られました。

私にとって「川崎病」との出会いでもあり、私の人生に大きな影響を与えました。

間もなく重松先生のご指導の下に、英語の論文がはじめて米国の専門雑誌に投稿されました(Pediatrics 1974;54:271-276)。その後1980年9月にスペインのバルセロナで開かれた第16回国際小児科学会で川崎病のシンポジウムが開かれました。川崎病

が初めて国際舞台に登場するきっかけとなる会でした。立錫の余地もないくらい大勢の小児科医がこのシンポジウムに集まり、通路まで埋まっていたのを覚えています。このようなことが積み重なり、川崎病は世界の Kawasaki disease になりました。

川崎先生は、私にとっては掛け替えない師であります。一人の小児科臨床医として、子どもに対する温かい心と愛情をもちつつ、社会の矛盾に真正面から向き合うという反骨精神に深い感銘を受けたのは私だけではありません。川崎先生はよく、「医学は厳しく、医療は暖かく」とおっしゃいます。日常の診療活動を通じて、まさにそのとおりの医療と医学の研究を実践された方であり、そのような心構えが川崎病の発見につながったことは間違いありません。

同時に、川崎先生は心置き無い飲み友達（こんなこと言ったら失礼かも）でもあります。楽しそうにジョッキを傾ける先生の笑顔は、私にとっては最も大切な宝物であります。

川崎病の原因は未だに五里霧中の状況にあるといえますが、一日も早く原因を明らかにし、川崎先生には原因解明祝賀会の乾杯をしていただかなければなりません。これからもいっそうご健康にご留意していただき、その日の来るのを楽しみにしています。（日本川崎病研究センター副理事長）

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

おめでとうございます

直江史郎

川崎先生、満 90 歳を迎えられ誠におめ

でございます。初めて先生にお目に掛かったのは、1970 年の 11 月だったと思います。日赤中央病院の病理に勤めて数ヶ月たった頃、仕事後テニスをして遊んでいて、左下肢のヒラメ筋を切った時に、たまたま古い木造の廊下を通りかかった先生が、車椅子を押してくださったのが始まりでした。

丁度、MCLS の初めての班会議前の最も意気盛んな時期でした。かなりの酒豪で、酒を飲んで大きな声で話す先生の姿を見て、小生は obsolete child（陳旧化した子供）と呼んでいました。この年寄りも、単に年齢を重ねただけの意味ではありません。

ほぼ 45 年の接触で、絶えず「臨床医は患者を良く診る事にある」が持論でした。パソコンばかり見ている医者が多い事への注意？皮肉？ 実際、川崎病の発見は、患者を注意深く観察した結果であることは事実であります。

川崎富作先生とそのご家族に栄光あれ！！（日本川崎病研究センター副理事長）

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

川崎富作先生、めでたく卒寿をお迎えになり誠におめでとうございます
加藤裕久



先生の偉業は今さら述べる必要はありませんが、国際的に有名な小児科や循環器の教科書のチャプターとして多くのページに記載されていることは我々日本人として大きな誇りです。

先生との出会いは当時冠動脈障害が大きな問題となってきた頃の 1973 年に私ども冠動脈造影を試み、普通の経過でよくなって元気になった患児にも無症候性の冠動脈瘤が見られることや、さらにいったん出来た冠動脈瘤が 1-2 年後に自然消退するいわゆる動脈瘤の regression を班会議で報告した時の事です。特に動脈瘤が自然に消退するなんて考えられない、あり得ないなどと病理の先生や小児科の多くの方は否定的な意見でしたが、川崎先生ただ一人、発育旺盛な乳幼児ではあり得るかもしれないとコメントしていただきました。この時の川崎先生の発言がその後、川崎病の心血管障害を解明していきたいと私が決心したモチベーションとなりました。それから 40 年あまり先生と親しくお付き合いいただき臨床家、小児科医としての心、研究者としての姿勢など多くの事を学ばせていただきました。先生の言葉「医療は暖かく、学問はきびしく」にそれが集約されています。

Nelson Textbook(1979 年)に初めて川崎病が紹介され世界中にその存在が知れ渡りましたが、1980 年代の始め頃は国際誌に発表される川崎病の論文がまだ少なく、川崎先生や私もよく国際学会や欧米の学会、大学、小児病院などに講演に呼ばれることがしばしばでした。川崎先生とご一緒に北米、南米、ヨーロッパ、アジアなど世界各地に講演して回った事をなつかしく思い出しま

す。行く先々で先生は質問攻め、サイン攻め、写真撮影と講演時間よりもこちらの方が長いなることもしばしばでした。楽しい思い出です。

川崎病のミステリーはなぜか半世紀前頃から見られるようになり、その後日本ではいまだに増加しているという、つまり原因は何かということでもあります。先生がお元気なうちに病因を解明することが後に続く者の急務であり、また先生がもっとも望まれている事でもありましょう。(日本川崎病研究センター理事長)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

川崎病が国際小児科学会初登場の日

小池通夫

あの日は私は午後、モンセラ岩窟教会に行った日だから 1980 年 9 月 10 日。バルセロナ ICP 会場、早朝でまだ数人が診断基準のカラーパンフを手渡していた。タイトルは MCLS、川崎夫妻はおられたが中学校の教室を拡大したような縦長の会場は閑散としていた。

ところが時間前に超満員、立ち見も出る騒ぎとなり、パンフは日本人から外国人にとなった。

川崎先生はサムライ、ゲイシャガールと巖島の鳥居の鮮やかなカラーライドで示され説明とともに流れ、「These are classical Japan」で小括。次は当時よく売っていたオートバイに「Kawasaki Motorcycle, but I'm sorry, not my relative's」で場内大笑。あと 2 枚のあと「These are newer Japan」そしてすぐ

「MCLS は日本で発見された新しい病気です」が続いた。

このあたりで場内はすっかり先生の話術に引きこまれ、その後2時間、最後に全国調査の結果から冠状動脈、死亡例の存在に拡がり、話を結ばれた。途端に会場は騒然、次々と質問の手が挙がった。中でも会頭のバルセロナ小児科のバラブリガ教授が熱心で川崎先生が引き込まれ思わず日本語で手足の発赤腫脹ぶりを「テカテカパンパン」と日本語で答えられたのをうけ「その通り、それが鉛中毒の症状だ」、「私は何百例もの剖検で経験豊富」と議論は続いた。確かにスペインの暑い日光を反射させる白壁は鉛白 $[PbCO_3Pb(OH)_2]$ が使われることは有名だが、日本でも塩化ビニル管になるまで水道の蛇口に連結するのは鉛管だったし、少し前までのお白粉は鉛白だったことも有名。日本でも鉛中毒はいた。私はそれにしても歯齦の鉛毒線も赤血球の塩基性顆粒もないし、第一、前腕の神経麻痺も脳症もないと思ったが、当時はこれを英語でどう言うのか自信がないので黙ったままでした（今も無口ですが）。

最後に会場から「MCLS(粘膜皮膚リンパ腺症候群)では重大な冠動脈や血管炎病変見落とす」と病名に異議の声があり満場一致で Kawasaki disease or syndrome がその時確定しました。

和歌山医大で小児循環器を始めたのは上村茂(1972 卒)が2年半の東京女子医大心臓研究センター(高尾篤良教授)の研修を終え帰ったのが1979年終わり頃、その後も米国留学などあり川崎病のエコーがほぼ完成したのは1982年ころ記憶しています。私にとっても混乱流会を繰り返した

た日本小児科学会評議委員会副議長として国分義行会頭の総会を成功させた年、B型肝炎母子感染予防の臨床治験を白木和夫教授と始めた年、この記念年に川崎先生の偉業の始まりを外国の現場で見たのはとても光栄なこと。川崎富作先生まだ55歳(go! go!)の晴れ姿。今後も続く苦闘を含め、先生、卒寿おめでとうございます。

(日本川崎病研究センター理事)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

川崎先生、卒寿おめでとうございます

中村好一



川崎先生が卒寿をお迎えになる、大変おめでたい話です。

私が初めて川崎先生のご尊顔を拝したのは、自治医大の学生時代でした。確か5年生の時、1980年です。もちろんこちらは one of them の学生でした。当時の自治医大は柳川洋先生が公衆衛生学の教授、そして柳澤正義先生が小児科学の助教授(教授は故鴨下重彦先生)をされていました。そのような状況の下に川崎先生をお招きして、川崎病に関するシンポジウムが開催されました。公衆衛生学教室のセミナーに入っていた(目的は酒を飲ませていただくため?)

とはいえ、「健康のために、勉強のしすぎに注意しましょう(当時のタバコのパッケージに記載されていた警告文のもじり)とうそぶいていた勉強不熱心な私も、物見遊山で会場に行きました。そして、当時は日赤医療センター小児科部長として現役ばりばりの川崎先生(考えるに、ちょうど現在の私の年ぐらいだったのだと思います)に対して、「先生は原因をどのようにお考えになりますか?」と大胆な質問をしました。今から考えると汗顔ものですが、ものを知らないとは実に恐ろしいことだと、ある意味で良い教訓になっています。

あれから 30 余年、大胆不敵な質問をした医学生は中年をすぎて初老となり、その当時は想像だにできなかった現在のような仕事をし、疫学の立場から川崎病の原因論についていろいろと述べています。早く原因を明らかにし、確定診断法を確立し、予防法を開発して、「昔、川崎病という病気があったんだよね」と、歴史としての川崎病を語る日が来ることを待ち望んでいます。

このような日を迎えるためには、川崎先生の益々のご指導を必要としています。これからもお元気で、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

写真は、川崎先生に自治医大にお越しいただき、学生に対して講義をしていただいた時のもの。机の上をきれいにしておけば良かったと、今でも悔やまれます。(日本川崎病研究センター理事)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

川崎富作先生、卒寿おめでとうございます
園部友良

小生にとりまして、川崎先生は、学問の師で有り、人生の師でもあります。川崎先生との出会いは、全くの偶然の積み重なりでした。小生は卒後 2 年の 1970 年春から、日本赤十字社中央病院(現医療センター)の神前章雄小児科部長のもとで研修を始めました。当時川崎先生は副部長になる直前でした。また、小生は日赤に来るまで、今や世界で認められている川崎病の原著も患者さんも見たこともありませんでした。当時の小児科病棟はバラック建てで、良くこんなボロ病棟に、高級住宅地である広尾や麻布在住の親たちが、子どもたちを入院させるかが、当初理解できませんでした。しかし働いてみると、小児科医全員と看護婦さん方が素晴らしいためとすぐに分かりました。特に川崎先生は患者さんのご両親に対してもわかりやすく、しっかりと病状などを説明されておりました。小児科研修医に対しても同様の対応でした。小児科医局での、新入院患者さんや難しい患者さんの検討会でも、問題点に関しては、理路整然と徹底的に意見を述べておられました。また、一睡もできない当直明けでも、くたびれた様子も見せずに、あの笑顔で働いておられました。まさに、川崎先生が良く述べられる「医療は暖かく、医学は厳しく」を実践されておられました。さて、もう一つ小生が驚いた点が、川崎先生のご家族への愛情の細やかさと深さです。これについては皆様も良くご存じだと思いますので、詳細は省略いたします。

川崎先生の恩師である、前任小児科部長の内藤寿七郎先生や神前章雄先生は 100

歳になってもお元気でした。川崎先生はこのお二人を超えて、たとえ今後川崎病の原因が解明された後でも、皆のために未永くご活躍なさることを切望致します。(日本川崎病研究センター理事)

Japan, Kawasaki Disease Research Center

Japan, Kawasaki Disease Research Center

人生の師川崎先生のご指導を得て 40 年超 今田義夫

川崎先生 卒寿心からお祝い申し上げます。川崎先生にご指導いただくようになったのは、昭和 49 年春で、大学卒業と同時に日赤に研修医として採用いただいた事に始まり、早、40 年を過ぎました。甚だ失礼なことに、不勉強な小生は、「川崎病」の川崎先生とは全く知らず入局しました。(実は川崎病のなんたるかもよく解かっていませんでした一本当に申し訳ありません)

当時、川崎病は子どもに突然死をもたらすとして、社会的にも話題になり、マスコミでもしばしば取り上げられ、川崎先生をテレビで拝見することが多くなった頃でした。

しかし、お忙しい中でも、多くの外来患者遅くまでを診察され、笑顔を絶やされることはありませんでしたし、医局員の指導にも情熱をもって当たっていらっしゃいました。特に、先生は回診を非常に大切にされ、質問にキチンと答えられないと厳しく叱責されることもしばしばありました。余程のことでもない、回診が中止されることはなく、国立公衆衛生院で転倒され(おそらく酔って)足を骨折されても、研修医の小生が車椅子を押して回診されました。

当時から、口癖のように、多くの病気で分かっていることはほんのわずかで、分からないことの方が圧倒的に多い! 分かった振りをするな! 無理に既存の疾患に当てはめるな! 教科書を信用するな! 等とお話しされていました。正に、先生のモットーである「医学は厳しく、医療は温かく」を日々実践されていて、狭い日本の学閥や権威を何より否定され、強い反骨精神を貫かれ、これが川崎病発見の基になったのだと近くにいて常と感じたことでした。日赤を定年退職されて 25 年を過ぎた今も、お元気で川崎病の原因究明に努力されている姿に接することができるのは何より幸せと感じます。

人生で本当に尊敬できる師を持てる人は少ないと思います。また川崎先生のお蔭で、多くの尊敬に値する先輩にお会いできたことも、小生の人生の何よりの宝となっています。

いずれ、川崎病も原因究明がなされることでしょう。このミステリアスな疾患を発見された責任上、予防法が確立し、患者発生 0 になるまで先生には見とどけていただく義務があります。ご自愛のほどお願いいたします。(日本川崎病研究センター理事)

Japan, Kawasaki Disease Research Center

Japan, Kawasaki Disease Research Center

川崎先生、40年の思い出

鈴木淳子



卒寿おめでとうございます。川崎先生は第一回の近畿川崎病研究会(1981年)に招かれて以来、関西が大好きになられ、国立循環器病センターの神谷哲郎先生ととりわけ親しくされました。神谷先生のもとで川崎病の研究をしていた私も、しばしば、ご一緒させていただく機会に恵まれました。川崎先生は、気さくに本音で無防備に話され、私のような若輩にも、暖かい言葉を常にかけてくださいました。今も若い人たちに進んで話しかけ励ましておられます。1992年、川崎先生が日本川崎病研究センター所長になられた頃、私は東京通信病院に転勤しており、川崎先生は外堀公園の散歩がてらに、川崎病の冠動脈画像をもって、しばしば病院に訪ねて来られました。優しい有名人の来院に看護師さんたちも大喜びでした。

2002年、私の夫が4ヶ月間の闘病で亡くなり、やっと生きていた私を川崎先生ご夫妻がイタリア講演旅行に連れ出してくださいました(写真)。川崎先生はイタリアのどの町に行っても映画スターのように取り囲まれ一日中サイン攻めでした。学会が終われば、みんな上機嫌で大声で喋り、食べて

飲んで、宴のたけなわでは、川崎先生はいつも皆にせがまれて「うちの女房にや髭がある」を身振り手振りおかしく歌われました。爆笑のなかで私が歌詞を英訳する役をおおせつかるのですが、「ぱびぶべ、ぱびぶべ、はどのような意味か。」とどこでも必ず根掘り葉掘り聞かれ困ったものでした。

中国、シベリアなどもご一緒させていただきました。ハードスケジュールもにこやかにこなされ、激しい腰痛があった旅も、車椅子や担架を使いながらも、周囲を気遣い、楽しそうに予定どおり旅行を遂行されました。

2011年、私の定年退職パーティでは、川崎先生の歌に奥様が踊り出され、一気に宴を盛り上げてくださり、40年間の多くの楽しい思い出に添えて、最高の華やかな思い出を頂きました。

川崎先生の笑顔は、みんなを幸せにしてくれます。先生の笑顔に出会うと、どんな会場でもホットします。いつでも、どこでも先生の笑顔を探してしまう私たちのために今後も、いろいろな会に来てくださるようお願い申し上げます。ただ、いつも初めから最終演題まで、最前列で聴いておられるのは、さぞかしお疲れではないかと案じております。どうぞ、もっとお気軽にご出席ください。未永く、ご健康をお祈り申し上げます。(日本川崎病研究センター理事)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

感謝そして光栄です

浅井 満



川崎富作先生、卒寿おめでとうございます。

1982年9月「川崎病の子供をもつ親の会」発足以来、本当にお世話になっております。

私たちの活動の大きな柱に川崎病講演会と相談会の開催があります。その第1回全国川崎病講演会の講師は勿論川崎先生です。1982年11月28日東京日本橋公会堂を埋めつくした600余名の参加者の目には、興奮ともいえる熱気あふれたものがありました。川崎先生は11月にも拘わらず汗を拭きつつ、熱く4時間半語り続けてくれました。(写真)

そのお姿を見て私は感動し、私たちは川崎先生と一緒に川崎病と向き合っていかなければならない、向き合っていこうと決意したことを記憶しております。それ以来30年以上に渡り、まさに全国で川崎病講演会の講師を引き受けて下さっています。それも講演料は一切受け取らずに。

川崎病という新しい疾患の概念が作りだされるに至るまでには、数多くの困難があったことと推測できますが、川崎先生はそれらを乗り越え、まさに Kawasaki Disease として全世界で認められています。

日赤医療センターご退職後、NPO 法人日本川崎病研究センターを立ち上げ、その際、私を理事に推薦して頂き本当に光栄に思っています。

川崎病は病因の解明を含め、問題は山積みです。健康に留意され、これからも NPO 法人日本川崎病研究センターでご活躍をされますことをお祈り申し上げます。

これまでのご厚情に対して「川崎病の子供をもつ親の会」の全国の会員を代表して心より御礼申し上げます。そしてこれからもお力添えよろしくお願い申し上げます。

卒寿本当におめでとうございます。

(日本川崎病研究センター理事)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

卒寿を迎えられる川崎先生と我が弟妹

小川和榮

昭和12年、羽子板と言うあだ名の名教師がおられるとすすめられ(因みに校長は扇風機と伺った)で受験した我が弟は東京府立第七中学・現都立墨田川高校で川崎先生とクラスメートになった。

私は母の代わりに入学発表を見に行きその後父兄会に出席した事もある。担任の先生は大変御苦労とねぎらって下さったが、弟より二歳年上の制服姿の女学生は一人前に取り扱っていただけないと感じた。でも普通の女の子は校内に入れないのだぞ。小川の姉貴は特別だとクラスメート達は歓迎して下さった。

その後先生は千葉、弟は前橋の医専に進学した。妹達のいる稲毛の別荘にはしばしば立ち寄られ、泊まっても行かれた。

東京大空襲で皆チリチリバラバラになったが、川崎病研究センター創立で拠所が出来た。弟は 56、上の妹は 48、下の妹は 64 歳で世を去ったが、遺産は役立ってくれたのはうれしい。先生の苦手な姉貴は 92 歳です。どうぞ先生は卒寿、白寿と私を越え我が弟妹の分も長生きし御活躍下さる事を祈り上げ心よりお祝い申し上げます。

最後に御得意の剣玉(けん玉)を一度は拝見させて下さいと妹分の鈴木和子さんからも申出て居ります。(日本川崎病研究センター監事)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

小児科医の原点川崎先生

村松孝夫

卒寿を迎えられ、おめでとうございます。川崎先生といえば、だれもがまず思い浮かぶのは笑顔ではないでしょうか。

私が勤めていた団体に川崎病原因究明委員会が設置され、その事務方を私が担当することになったのですが、先生に初めてお目にかかりましたのは 33 年前のことです。幼稚園か小学校低学年の先生と言われてもまったく違和感がなく、小児科医にはぴったりの先生という印象でした。当時 30 歳そこそこの私のような若輩者に対しても、いつもにこやかに、やさしく声をかけてくださいました。

アメリカに心臓協会という循環器病の研

究からその予防に至るまで行っている団体があり、毎年学術集会在開催されています。その学術集会上に世界各国から一般演題発表の応募があり、採用されることも大変なことですが、先生は特別講演者として招待されています。川崎病を発見され、日本に止まらず世界の隅々にまでそれが広く知れ渡るところとなった偉大な先生ですが、その前に医学の道を選び、小児科医となり、医療の現場に取り組みられ、あとに続く小児科医のお手本になられたことがもっと大きなことではないでしょうか。お子さん一人ひとりを丁寧に診られたことが、川崎病発見に繋がったものと思います。この間 70 年に亘り多くの子どもたちと接し、先生は子どものためにこの世に生を享けられたのだと感じる次第です。先生のお弟子さんである方々にもお世話になり、親しくしていただいています。そういった方々を見ても、先生がいかに慕われ尊敬されているかを窺い知ることができます。

少子化の時代にあっても、毎年川崎病に罹る子は減ることはありません。小さなお子さんが大変な思いで、川崎病と闘っています。原因究明委員会に関係してきただけの私でさえも思うのですから、発見されて 50 年が経過した先生とされましては、どれほど待ちわびていることでしょうか。原因解明は今や先生始め多くの人の悲願ともなっています。何としてでも成し遂げるまで元気でいましょう。(日本川崎病研究センター監事)

Japan Kawasaki Disease Research Center

事務局から

【センター日報】

平成 26 年 5 月 17 日 平成 26 年度第 1 回理事会開催 6:00pm ~ (於:当センター)

平成 26 年 6 月 7 日 平成 26 年度総会と研究報告会 (於:エッサム神田) 1:30pm

各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。

平成 26 年 6 月 7 日 平成 26 年度第 2 回理事会開催 17:00pm ~ (於:エッサム神田)

平成 26 年 8 月 22 日 平成 26 年度公募研究選考委員会開催 17:00pm ~ (於:当センター)

平成 27 年 3 月 6 日 平成 26 年度第 3 回理事会開催予定 (於:当センター)

【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数 265】平成 26 年 12 月末現在

[正会員 : 100 名、4 法人、6 任意団体] : [賛助会員 : 151 名、3 法人、1 任意団体]

【研究会・講演会】

第 39 回近畿川崎病研究会 平成 27 年 3 月 7 日 (土) 13:00 ~ 於:テイジンホール

会長:片山博視先生 (大阪医科大学小児科)

第 34 回東海川崎病研究会 平成 27 年 月 日 (土) 14:30 ~ 予定 於:愛知県医師会館

地下 1 階「健康教育講堂」 当番幹事:犬飼幸子先生 (名古屋市立大学病院小児科)

第 34 回関東川崎病研究会 平成 27 年 6 月 20 日 (土) 14:00 ~ 於:日赤医療センター

事務局代表:土屋恵司先生 (日赤医療センター小児科)

第 35 回日本川崎病学会 平成 27 年 10 月 9 日-10 日 (金・土) 於:鹿児島県医師会館

会頭:野村裕一先生 (鹿児島大学医学部小児科)

第 16 回北海道川崎病研究会 平成 27 年 10 月 日 (土) 16:00 ~ 予定 於:

代表世話人:布施茂登先生 (NTT 東日本札幌病院小児科)

第 11 回国際川崎病シンポジウム 平成 27 年 2 月 3 日 ~ 6 日 於: Honolulu, Hawaii

問い合わせ先: 日本川崎病研究センター Tel:03-5256-1121, Fax:03-5256-1124

「川崎病の子供を持つ親の会」問い合わせ先: Tel:0467-55-5257 浅井 満

国際川崎病シンポジウム参加の皆様へ!!!

この度、ハワイで開催される第 11 回国際川崎病シンポジウムでは 2 月 5 日 (木) 18:30 からレセプション&ディナーが予定されています。その後に皆様のご要望にお応えしてカラオケパーティーが用意されるそうです。

川崎富作先生も参加されますし、Jane Burn 先生ほか多くのメンバーが毎回楽しみにしています。

シンポジウムに参加される皆様、こちらにも奮ってご参加下さい!!!

第 11 回国際川崎病シンポジウム日本側事務局代表 佐地 勉

新会員募集にご協力ください!!!

正会員 年会費 20,000 円

賛助会員 年会費 5,000 円

【川崎病に関するご相談】

当センターでは、川崎富作理事長が川崎病に関するご相談を受けております(無料)。お電話お手紙、Fax 等でご相談をお寄せください。(電話：火曜日・金曜日：午後 2 時 ~)

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター
〒101-041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階
Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124